

< 2018年3月 >

古賀 順子

「1900年パリ万国博覧会」

フランスの観光シーズンは、復活祭(今年は4月1日の日曜日)から本格的に始まります。パリのメトロもホームの改修、新しい車両への交換作業などが続いています。パリ市民生活に欠かせないメトロを始め、今日のパリは1900年パリ万博に負うところが大きいです。19世紀を象徴する万国博覧会は、1851年ロンドンに始まり、世界各国を招待し、パビリオンを建て、工業と科学技術、芸術や文化を競い合う時代の幕開けとなります。イギリスやドイツに負けたくないフランスは、国家の威厳にかけて、6回のパリ万博(1855, 1867, 1878, 1889, 1900, 1937年)を開催し、その熱狂には目を見張り、1900年頂点に達します。

会期は1900年4月15日から11月12日までの7ヶ月間、入場者数は5千万人。1900年フランスの人口4千万人ですから、科学工業の進歩を信奉し、明るく新しい未来を疑うことなく信じた「ベル・エポック」を象徴する一大イベントと言えます。

「グランパレ」「プチパレ」「アレキサンダー3世橋」が誕生し、フランス共和国を代表する万博地区が完成。東洋への憧れ(オリエンタリズム)を具現化した高さ45mの「ビネの入場門」(建築家ルネ・ビネ 1866-1911)が色とりどりの電気照明ガラスに輝き、「動く歩道」が設置され、万博会場3.5kmを時速8kmで運行し入場客を驚かせ、「未来の通り」と名付けられます。33名の候補を勝ち抜いた建築家シャルル・ジロー(1851-1932)の手に成る「プチパレ」は、フランスの歴史上初めて、美術館を目的として建立されます。科学や工業、産業に秀でる国フランスは、それに相当する芸術・文化を誇示すべきで、「ボザール様式」と呼ばれ、ギリシア・ローマ古典様式、ルイ14世様式、バロック様式などフランスの過去の栄光時代を折衷し、国威高揚を図る様式の建造物が建てられました。向かい合う「グランパレ」は、今日なお、西洋一のガラス建築

として、世界の中心を自負する栄光のパリを物語っています。当時の最新建材である鉄とガラスの傑作で、72,000平方メートルの広さを誇り、中央ドームの高さは45m、使用された鉄の量は6,000トン、エッフェル塔の鉄の分量(7,300トン)にも匹敵します。シャルル・ジロー、アンリ・デグランヌ、アルベール・ルーヴェ、アルベール・トマの4人の建築家による共同設計であることから、その規模の大きさを図ることができます。また、フランスとロシアの友好を象徴して、右岸と左岸の万博会場を結んだのが「アレキサンダー3世橋」で、パリとサン・ペテルブルクの街を象徴する豪華な装飾が美しく、セヌ川に支柱を必要としない長さ45mの弓状の渡りは、鉄とコンクリートという当時の新建材があって出来たことでした。そして、1900年の万博を機に、セヌ川クルーズが広く一般に好まれるようになります。

7月19日、パリ万博の一環として、地下鉄「1号線」(シャトー・ド・ヴァンセンヌとポルト・マイヨ間)が開通し、メトロがスタート。エクトール・ギマール(1867-1942)がアール・ヌーヴォー様式でその入り口を飾ります。さらに、メトロだけでなく、ロンドンのビッグベンに次いでヨーロッパ第2の時計塔が人目を引く「リヨン駅」、「東駅」、「オルセー駅」の国鉄3駅も開通し、フランス国内外から大勢の人々を万博会場へと運送することができたのです。

装飾においては、ルネ・ラリック(1860-1945)が全く新しい芸術を展開し、アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)のポスターが一世を風靡し、リュミエール兄弟が発明した映画が広く一般に普及していくこととなります。服飾の世界では、ジャンヌ・パカン(1869-1936)、ポール・ポワレ(1879-1944)が、パリ・オートクチュールの曙を告げます。

118年を過ぎた今日、「プチパレ」では「パリのオランダ人、1789-1914年、ゴッホ、ドンゲン、モンドリアン・・・」展(2018年2月6日から5月13日)が開催され、1900年万博当時の使命を守り続けています。地下鉄網は14号線まで拡張し、観光船は増え続け、モード発信の地として、パリは今なお健在です。